

「蜻蛉日記」上巻の成立に関する私論

古賀, 典子

<https://doi.org/10.15017/12234>

出版情報 : 語文研究. 25, pp.38-53, 1968-03-10. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「蜻蛉日記」上巻の成立に関する私論

古賀典子

蜻蛉日記が難解なのはその「自己特有的文体」にある、と言われているが、作者道綱母の、このいわば「一人合点」の文体の難解さは、複雑な成立事情を明らかにすることによって、多少なりとも軽減されるであろう。本稿に於ては、蜻蛉日記上巻の成立について私見を述べたい。

一

蜻蛉日記に關してその成立の面からのアプローチは、従来も様々に試みられており、それらは、

(一)下巻末年天延二年(九七四年)以後、晩年に近い作者が全体を回想して書いたとする説、

(二)天祿二年(九七一年)後半に鳴瀆籠りの体験を経た作者が中巻の世界までを一応まとめ、下巻は上中巻執筆によつて深めた反省と落ち着きとを以て大体日記的に記録していったとする説
(三)上巻と中巻の間にも執筆時期のずれを認めて、上巻の執筆時期を安和二年(九六九年)に置く説、

の三説に大約され、一般には(二)が通説と目されていた。

以下に各説を概観し問題点を探ってみる。

池田龜鑑博士は、日記中の記事の、史実との相違を主たる根拠に(一)の説を出された。岡一男博士は、史実との相違に加えて、作者の執筆意図、芸術構成、同時代の他の文学作品である「宇津保物語」「大和物語」「古今和歌六帖」との関係などを考慮して、執筆年代を天元五年(九八二年)と推定することによつて池田博士の説に左袒された。ところが、本文記述と史実との相違については、後に藤本俊枝氏によつて、(回想によつて書かれた)とする根拠にはなつても、そのまま(上巻が一括して作者の晩年に執筆された)とする根拠にはなり得ないことが明らかにされた。更に、他の作品との関係については、それらのはつきりした成立年代が不明であること、及び作品間に類似の表現があるからといって簡単に作品成立の前後関係を論ずることにはできないこと、などの理由で全巻一括執筆説の論拠としては必ずしも適當でない。又、(蜻蛉日記の芸術構成)については、作品の記載事実や作者の内面の問題をみてみれば、作者によつて意図されたものとは到底考えられないのであつて、このことを以て成立論の根拠とはなし得ない。

このようにみえてくると、全巻一括執筆説が出される有力な根

拠となった、本文記述と史実との相違や、他の同時代の文学作
品との交渉、がその論拠となり得ないことが明白である以上、
記述量の変化、日次の現れ方、作者の心理の変化などの様々な
日記内部の変化について顧慮しない池田、岡両博士の説が、本
日記の成立論としては不適當であることは明らかである。

柿本煥氏は、日記冒頭の序文の解釈を根拠に全巻一括執筆説
に加わっておられるが、序文の解釈自体に多くの問題が残され
ていることでもあり、これを以て執筆時期推定の根拠とするの
は無理ではあるまいか。

次に前述(二)の説の検討に移る。

藤岡作太郎博士は、日記内部の記述の精粗、回想記から日次
記への移行などに着眼されて、天禄二年起筆説を出されたが、
喜多義勇博士は更に、作者の内面的執筆契機をも推断されて、
「上中巻が天禄二年の後半に於て執筆されたものであり、殊に
上巻は一つの纏った自叙伝として、中巻は稍その延長といふ形
に於て作られてゐる」と論じられ、上巻と中巻が分けられたこ
とについては、「はじめ連続的に執筆していたものを、内容の
精粗の差をも考慮して区切りのよい初瀬詣の年で、しかも十五
年目というところで上巻を立てた」とされた。そしてこの両博
士の説が今日の通説の原型となつてゐる。

蜻蛉日記の成立を論ずる目的が、日記内部の複雑な様相を作
品の成立事情と関連させて考察することによつて、書かれてい
る内容をよりよく説明することに思えば、記載の内
外面から考察を加えた本説は、成立を論ずる方法としては、本
道を行くものと思われる。

しかし、この天禄二年起筆説にも問題が残らない訳ではなく、
藤岡・喜多両博士共に序文跋文で括られた上巻に一応注目され
ながらも、上巻から中巻にかけての様々な変化について、深く
は顧慮されていない。

(三)の説を出された守屋省吾氏は、上巻から中巻にかけての時
間的記述の精粗、記述量の多少等について詳細に調査された結
果、上巻最終年安和元年と中巻初年安和二年との間に大きな断
層を認められて、「具体的な執筆時を天禄二年の秋冬にあると
仮定して、過去にさかのぼること十八年の回想記述であるなら
ば」このような断層はある筈がない、として、従来の上中巻連
続執筆説を否定し、上巻の成立時期を中巻安和二年から天禄元
年正月までの本文粗笨期間にあると推定された。氏の説は、従
来不問に付されがちであつた上巻と中巻の間の外面に現れた客
観的記載事実を上巻の成立に結びつけた点で、旧説の弱点をつ
つくものである。

確かに守屋氏が言われる如く、安和元年から同二年にかけて
の日付記述量の急増を、蜻蛉日記そのものの日録への変化、ひ
いては執筆時期の相違による変化へ結びつけることは不可能で
はない。しかし、そのような量的変化のみを以て直ちに日記執
筆時期の相違とするには聊か不安を感じる。氏の結論に至る前
に、問題の安和二年前後の記述に、日付記述の量的変化のみに
とどまらず、質的变化をも追跡して見る必要があるのではない
か。そして、場合によつては、この方面の考察の結果を併せ考
える事により初めて、明確に執筆時期に関する結論が導かれる
のではないかと期待できる。

自己の作品に自ら「かげろふの日記」と命名した作者が、作品執筆の時点に於いていわゆる「日次の記」ということをどのよう
に意識していたか、上中巻について日付もしくはそれに準ずると考
えられるような時間的記述を挙げてみる。

上巻

天曆八年

○九月になりぬ。つごもりがたに、しきりて二夜ばかりみえぬほど——。

(一四)

天曆九年

○春夏なやみくらしして、八月つごもり、とかう物しつ。(一八)

○十月つごもりがたに三夜しきりてみえぬ時あり。(二八)

天曆十年

○三月ばかりにもなりぬ。桃の花などや取り設けたりけん——、今日ぞみ

えぬ。四日、つとめでぞ皆みえたる。(二〇)

○五月三、四日、のほどにかくいひやる。(二二)

○六月になりぬ。ついたち、かけて、長雨いたうす。(二二)

天徳二年

○時は七月五日のことなり。ながきものいみにさしこもりたるほどに、かくありし返りごとには、あまのかはなぬかをちぎる心あらば——。

(三八)

応和二年

○そのころ、五月廿余日ばかりより、四十五日の忌だがへむとて、あがたありきの所にわたりたるに——。(四〇)

○たなばたは明日ばかりと思ふ——。十五六日になりぬれば、盆くわなどするほどになりけり。(四三)

応和三年

○年かへりて、なでうこともなし。——このついたちよりぞ、殿上ゆるされてある。(四四)

康保二年

○ゆく人は二藍の小桂なり、とまるはたゞ薄物の赤朽葉をきたるを、ぬぎかへてわかれぬ。九月十余日のほどなり。(五四)

康保三年

○九月になりて——。また、おなじつごもりに、あるところにおなじやうにてまうでけり。(六四)

○秋はてて、冬はついたち、つごもりとて、悪しきも善きもさわぐるものなれば、ひとり寝のやうにてすぐしつ。注12(六五)

康保四年

○三月つごもりがたに、かりのこの見ゆるを——。(六六)

○五月にもなりぬ。十余日に、内裏の御くすりのことありての、しる。(六六)

○乗物なきほどにはひわたるほどなれば、人はおもふやうなりと思ふべかめり。十一月なかのほどなり。(六八)

○十二月つごもりがたに、貞観殿の御方、この西なる方にまかで給へり。つごもりの日になりて——。(六八)

安和元年

○明けぬれば、昼つ方、客人の御方、男などたちまじらねばのどけし。——。日たくれば、節句まりなどすめる。こなたにもさやうになどして、十五日にも、れいのごとしてすぐしつ。(六九)

○月たちでは、大嘗会の毛見やとしまわぎ、われも物見のいそぎなどしつるほどに、つごもり、またいそぎなどすめり。(七九)

上巻の時間的記述の多くは月単位もしくは季節単位になっていることについては、守屋氏も指摘されているが、その中に散見する日付或はそれに準ずるような記載は以上の通りである。それらのうちの過半数を占める「ついたち」「つごもり」という語は、特殊な場合を除いて、月の上旬、下旬の意味であるから、正確な日付とはいえない。その他の日付についても、よくみてみれば殆どの場合、「節句」「七夕」「盆」「正月」などの行事から推測可能な日次であることを思えば、これらの記載は正確なメモあるいは記憶によるものというよりむしろ、記述内容から推測して付記されたものと考えてよいであろう。

中巻

安和二年

○かくはかなながら年たちかへるあしたにはなりにけり。(八一)

○またの日、こなたあなた、下衆の中より事いできて。(八二)

○三月三日、節句など物したるを、人なくてさうくしとて。(八三)

○中の十日のほどに、この人々、方まきて小弓のことせんとす。(八三)

○廿五六日のほどに、西の宮の左大臣ながされ給ふ。(八三)

○そのまへのさみだれの廿余日のほど、物忌もあり。(八四)

○閏五月にもなりぬ。つごもりより、何心地にかあらん。(八五)

○六月の晦日、たに、いさゝか物おぼゆる心地などする程に。(八六)

○廿余日の程に、「御嶽に」とて急ぎたつ。七月一日のころ、あ

かつきにきて、——昼つ方なへぐなへぐとみえたりしは。(九)

二) ——など思ふほどに、晦日の日、春のなかばにもなりにけり。(九)

七) 中巻初年安和二年の場合、上巻の例によれば「なかごろ」「つごもり」などの言葉で大別すべき所を、記憶が正確でないにも拘らず「中の十日のほど」「廿五六日のほど」と「日」を表記している。又五月、閏五月、七月、八月、十一月は、一と月のうちに記述内容は一件しかないにも拘らず日付を明記している。更に、年中行事などによって日付が推測可能だと思われない日次記載も多くなっている。これらを総合的にみれば、安和二年の記述には、記述内容が変るごとに日次を付そうとする作者の意図が、微弱ながら窺われるのではないだろうか。

天禄元年

○三月十日のほどに、内裏の賭弓のことありて、——十日の日になりぬ。

——事はてがたなる夕暮に、——また十二日、——夜ふけて——

——五日の日、まだしきにわたりて——その日になりて、まだしきに物して——と思ふに夜にいりぬ。その夜も、のちの二三日まで——。

(九七—一〇〇)

○かくて四月になりぬ。十日よりしも、また五月十日許まで——。(一〇〇)

○かくてふるほどにその月の晦日に、「小野宮の大臣かくれ給ひぬ」とてさわぐ。(一〇一)

○さながら六月になりぬ。かくて数ふれば、夜みぬことは三十余日、昼みぬことは四十余日になりけり。(一〇二)

○かくながら廿余日になりぬる。——唐崎へともものす。寅の時ばかりにいでたつに——賀茂川のほどにてほのくくと明く——いきもてゆくほどに、巳の時はてになりたり——未のをはりばかりに果てぬれば——日たくれれば——またの日は困じくらしめてあくる日——されどつれなくて晦日ごろになりぬ。(二〇二—二〇六)

○中略

○七月十余日にもなりぬれば、世の人の騒ぐまに——石山に十日ばかりと思ひたつ。——賀茂川のほどばかりなどにぞ、——有明の月はいとあかけれど——粟田山といふほどにぞ——山科にてあけはなるゝにぞ——申の終りばかりに寺の中につきぬ——。(二〇〇—二〇七)

○かくて八月になりぬ。二日の夜さり方にはかみにえたり。——またの日もひぐらしいふこと——。(二一八—二一九)

○五日の日は司召とて——。(二一九)

○十一月になりて大嘗会とてのゝしるべき——、ことはつる日夜ふけぬほどにものして——、つとめて——、二日も——、それより後も音なし——。(二一九—二二二)

○十二月の朔日になりぬ。七日ばかりの昼、さしのぞきたり。——おとづれもなくて十七八日になりけり。今日の昼つ方より、雨いといたうはらめきて——、雨の脚おなじやうにて、火ともすほどになりぬ。

(二二二—二二三)

天禄二年

○朔日の日はみえずしてやむ世なかりき。さもやと思ふころづかひせらる。未の時ばかりに——夜もさてやみぬ。つとめて——さて二三日もすごしつ。三日、また申の時に——今日まして思ふころおしはか

らなん。またの日は大嘗とてのしる——今宵さりととも心みんと——夜よきほどにて——あくる日、まだつとめて——また二日ばかりありて——。(二二三)

○中略

○今日は廿余日、雨の脚いとのどかにて、あはれなり。夕づけて、いとめづらしき文あり。——五日、なほ雨やまで——。(二二六)

○後略

天禄元年春から秋にかけては、それまでの贈答歌を主軸として展開してゆく私家集の方法から閉鎖的な散文に移行して、日次記載はより詳細になっており、時刻の記述も多く、天禄元年秋頃からは明らかに、記述内容と日次表記が不即不離の関係で進行し、日次記体としての記載がほぼ完全に行われるようになる。

このようにみてくると、上巻に於る季節や月日の記載は家集の執筆方法によってなされたものと考えられ(このことについては後述する)、明らかに日次記載についての特別な意識は認められない。ところが中巻になると様相が変わり、安和二年の、殆ど記憶によって記されたと思えない記述に於ても概ね日付が記されており、続く天禄元年以降の、日次記的メモの存在を予想させる程詳細な日次記載に連っている。このことから、中巻は、作者が日次記載について上巻と異った「意識」を持って書いたのではないかと考えられる。作者が中巻に於てこのように日次記載を意識していたことは、とりも直さず、自己の作品を「日記」として企図していたことなるのではなか

ろうか。

もし、上中巻が連続的に執筆されたのであれば、日記体としての意識が上巻から中巻への移行点で急に顕著になるのはおかしい。上巻と中巻の間にみられる作者の日記体に対するそのよな意識の相違を、上巻と中巻の成立時期のずれによるものと考ええる事は可能ではなからうか。つまり、中巻本文は「日記」というものについて特別な意識をもった別のある時点^{注14}で書かれたのではないかと考える訳である。

この推論は、日次記載の量的関係から考察された守屋氏の論とも矛盾しない。

ところで、ここに問題となるのは、上巻本文とその序跋の関連である。

蜻蛉日記中、作者が「日記」の語を用いたのは、「人にもあらぬ身の上までかき日記して」（上巻序文）、「あるかなきかの心ちするかげろふの日記といふべし」（上巻跋文）、「身の上をのみする日記には入るまじき事なれども」（中巻安和二年三月）の三箇所に限られる。ここで不審に思われるのは、「作者は上巻を「日記」であると宣言しながら、中・下巻に比較すると、明らかに「家集」に近い形態である。」^{注14}と言われているように、上巻本文が、その中に「日記」という言葉を含まず、又内容的に見ても明らかに贈答歌に倚り懸った私家集的執筆方法による身の上話であり、時間的記述は殆ど季節単位または月単位にしか現されておらず、日次の記というには程遠いにも拘らず、その序文跋文に「日記」という語が使われている事である。この事実はどのように説明できるであろうか。

私はこの矛盾を、上巻本文とその序跋の成立時期の相違によるのではないかと考える。

上巻の序文跋文について喜多博士は、「両方の書き出しが一致している点で、上巻の頭尾が本文成立の上で添えられたことを明白に示していると思う。」^{注15}と言われ、又へ序文に書かれた作者の創作意識ないし意図というものが最初から確立していたとは思えないとして、秋山虔先生は、長い年月にわたる兼家との結婚生活の煩惱を、表現された世界として余すことなく客観視することができた頃の境地で、上巻序跋は加えられたのであろう、と考察された。^{注15}このように上巻序文跋文が、本文成立の後添加あるいは補筆されたと考えれば、当然本文執筆時の意識と序跋補筆の時のそれとは異なることが考えられるわけで、前に指摘した両者間の内容的矛盾も理解できる。

それでは上巻序文跋文の成立時期と中巻成立のそれとの関係はどのように考えたらよいであろうか。このことについては、従来様々に考えられているが、私はここに一つの仮説を提出してみたいと思う。

上巻の序跋には共に「日記」という言葉が見出され、中巻には先にも挙げたように、本文中に「身の上をのみする日記」という一文がみられ、日次記載の面からも「日記」という意識が窺われる。上巻においては日次記に対する特別な意識はみられないのであるから、中巻初年か窺われる、かなり明確に作者の中に成長している「日記」に対する意識に、ある契機を想定することは不可能ではないと思う。私はこの契機を、上巻序文跋文の執筆による、とみたいのである。つまり、作者は「日記」

でない上巻本文にその成立後のある時点で、「日記」であるという事を明記した序跋を付したと考えるわけである。

このように考えられる根拠は全くない訳ではない。

日記はその成立過程の上から私家集と無関係なものではなく、私家集↓日記、の経路は容易に想像できる。和歌の詞書には、その歌が詠まれた情況が説明されるのであるから当然時間的記述を伴うことが多く、私家集が後世「日記」という別名で呼ばれることが多いことから解る通りである。

又、作者の作品に対する意識を考えると、道綱母が、兼家との結婚生活によつてもたらされたものではない身の上の実感を書き綴つてみようと思つた時に、身辺に起つた真実の出来事を思い出すよすがとなつたものは、手許に残っている贈答歌や文反古であつたに違いないが、それ等の素材ではかかない身の上話を書き綴る方法は、従来の私家集的編纂の方法しかなく、というより、作品としての形式を意識的に撰択する以前に、自然に私家集的方法によつて身の上話を綴り始めたに相違ない。しかし、道綱母の鬱積した心情は素材に詠み込まれたものをはみ出て、詞書の散文的部分を増大させることよつて始めて表現できる性質のものであつたから、結果的に従来の「家集」という概念に当て嵌まらなくなつてしまひ、かといつて無論「昔物語」ではないのだから、作者が上巻を書き終えた後、自己の作品に命名することを思つた時に、日次の記ではないけれどもそれに近い時間的記述と記録的性格を考慮して、この作品に最も近い作品形態である「日記」の語を選んだのであろう。ところが、従来の「日記」という作品形態が日次の記である

ことを原則としてしていることについては、作者も多少は承知していただろうから、上巻本文と序跋のこの矛盾は、「日記」ということに對して作者にある種の関心を喚起させたに相違ない。この事が契機となつて、次に中巻をまとめる事を企図した時に、殊更に日次に留意したのではなからうか。

このように考えれば、上巻序文跋文は、上巻の成立以後、中巻の成立以前の時期に想定する事が可能である。

三

蜻蛉日記は、初めに上巻本文が成立し、次に序跋、中巻の順に成立したと想定したが、それではその実際の執筆時期を何年頃と考えたらよいであらうか。

この問題に関しては、本文或はその他の資料のいずれにも執筆時期に関する記録がないのが現状であるから、直接にこれを決定できる決め手はない。従つて私は、先にも触れた、実際の蜻蛉日記執筆の素材となつたと考えられるメモ類に対する考察を行い、それらの素材を繋ぎ合せてまとめた時の作者の意識、つまり、それぞれの巻を統一して流れている作者の意識、と合せ考へて、間接にその推定を試みた。

蜻蛉日記上、中、下巻の歌の数を調査してみると、上巻が一・二四首、中巻が四五首、下巻が八〇首となつていて、中巻と上巻についてみると中巻は上巻の歌数の約三分の一近くに減つており、しかも中巻の四五首中、半数以上の二四首が中巻初年安和二年にかたまつてゐる。上、中、下巻の各々の全体の記

述量はほぼ等しいのであるから、歌数が多い巻は散文に対する歌の密度が大だということになる。各年当りの歌数についてみると、上巻では一二四首が、記載のない三年間を除いた残りの十二年間に一年につき十首内外の割合で平均的に分散して上巻は一つのまとまった、バランスのとれた私家集的作品であるといえる。それに反し中巻では、安和二年一年間で上巻末年安和元年の十二首のちょうど二倍の歌数があり、次の天禄元年で再び二分の一以下の十首に減少している。この上巻末年安和元年から中巻初年安和二年にかけての歌数の倍増は、記述量の増加及び日次記載の激増に加えて、上巻と中巻の不連続を強調してはいないだろうか。又、中巻安和二年から翌天禄元年にかけての歌数の半減は何を意味するのであろうか。天禄元年の記述量は安和二年のその一倍半以上にもなっているのであるから、天禄元年に於る散文量の激増は容易に理解できる。しかも、安和二年までの歌は贈答歌が殆どであったのに対し、天禄元年では贈答を目的としない歌、つまり作者の独詠の歌が殆どになっている。本作品中の歌、特に贈答歌は、明らかに実際の日記執筆の際に素材として存在していたと考えられるのであるから、この素材としての贈答歌が急激に変化する中巻安和二年から翌天禄元年にかけての歌の現れ方をもう少し詳細に検討してみることにする。

安和二年については、正月一日。兼家との贈答歌、三月三日及び十日頃の侍女達の贈答歌、五月廿余日兼家との贈答歌、閏五月作者病床にての独詠、兼家への遺言、六月晦日が高明の北の方に贈った長歌、七月高明の北の方との贈答歌、八月師尹

の五十賀の屏風歌、十一月雪の降るのをみての独詠、などの歌を中心としてその年の出来事が記されている。歌や手紙などの素材が直接に現われていない箇所は、正月二日の下人の喧嘩とそれに続く作者の家移り、三月廿五六日の高明左遷事件、六月廿余日作者の転居と兼家の来訪、の三件で、それらはいずれも記憶によって書かれたと思われる散文的箇所である。贈答歌を素材としながらそれを軸として記載が進展する様相は上巻の方法に類似しているが、歌数、記述量、日次記載が激増し、記述内容も非常に詳細になっている。

ところが、天禄元年に至っては、それまで贈答歌に倚り懸っていた執筆方法が急激に影をひそめ、自己表出の方法は全面的に散文の方法に倚り懸っており、書かれている内容は、作者自身が物事に対処した時の心理的体験そのものである。贈答歌などの素材を繋ぎ合せてゆく部分で作者の創作意識が顔を出している上巻とは異り、素材自体が、それを繋ぎ合せる部分での補正を拒否する一つのまとまりを持っていたのではないかと思われる。それは天禄元年の記述に散見する歌が、書き贈る相手を予想しない独詠歌になっており、しかもその歌が散文的段落の締め括りとして用いられていることから言えるのではなからうか。

この天禄元年の作歌態度の変化は一体何を意味するのであろうか。考えられる可能性としては、中巻執筆の時点で、存在していた贈答歌欲や手紙などの類とは別に、散文の記述内容に合せた歌が作歌されたのかもしれない、ということがある。しかし、前年の安和二年まで、或は続く日次記的部分が、多分に素材に

倚っている事を考えれば、この天禄元年だけ贈答歌その他の素材を無視したとは思われない。従って、この年には前年までとは作歌態度の異った自己目的なこれらの歌が素材として存在したか、もしくは歌が素材として特別に存在しないで、これ等の歌を含んだ散文のまとまりが素材として存在していたか、もしくは素材となるべき歌や散文のメモが何も存在しなかったかであろう。

野村精一氏は、「短歌を中心とした部分は、ほゞ歌、反古、モワールがあったと考えられ、と同時にその逆である所の散文がヘゲモニーを握った部分は、それ以上に記憶を支えたものが、即ち情念の奔騰があったのではなかったか」と言われたが、上巻に於る父倫寧の離京（天曆八年）、町小路女の事件（天曆九年）、同女出産（天徳三年）、母の死と作者の大患（康保元年）、兼家邸訪問（康保三年）、初瀬紀行（安和元年）及び前述の中巻安和二年の三事件、などの記載については確かに氏の言われる如くであろうと思うが、天禄元年に至ってはこの散文量の激増及び作歌態度の変化は、ただ単に「情念の奔騰」による。こゝにはやはり何らかの素材自体の変化があったと考えるのが妥当ではないだろうか。つまり、天禄元年の記述の素材となったものは、前年までのそれと質的に異ったものであったと考えられる。前に挙げた、同年の日記記載の詳細さを考慮すれば、この年は既に、作者にとつての非日常的経験は相当詳しく散文体で記されていたのではないかと考えられる。散文の感想文が記されたということ、及び詠み贈る相手を予想せずに自己

目的的な作歌が多くなされたということは、これらが記される時点に於て作者は、自己の内面を書き記す行為そのものに意味を認めていた、ということである。つまり、「書く」ということが、贈答歌や手紙を人に書き贈る事と同等もしくはそれ以上に、自己表現の場になり得る事を発見していたのではなからうか。更にこれに続く天禄二年（厳密には天禄元年秋頃からみられる傾向であるが）には、非日常的経験のみにとどまらず、極く日常的出来事までも記した殆ど日記的なメモが存在していたのではないかと思われる。「今日」「今」あるいは「今宵」などの歴史的現在の表現がこの頃から頻繁に地の文に現れるのであるが、これは作者が文章表現のテクニクとして意識して使用したと考えるよりも、むしろ、事ある毎に時を移さず記されたメモの中に自然に用いた表現がそのまま本文に移された結果とみる方がよいように思われる。

以上、色々な角度から考察を加えたが、このようなことから結論的に言えることは、安和二年秋頃までは贈答歌や手紙の類が素材となっており、天禄元年以後は独詠歌を所々に含んだ散文のメモがほぼ完全なまとまりをもった形で存在していたと考えてよいのではなからうか。そしてこの散文のメモは、上巻の時点で折りにふれて詠まれた贈答歌と同じく、作者が何らかの非日常的な体験をした時に限って記されていたが、後にはかなり日常茶飯的なことについても記録されるようになり、次第に日記的な、或は日記執筆を意識したメモへと変っていったのであろう。

上巻から中巻にかけての素材の変化は、ほぼ以上のようにである。

実際に執筆される際の素材となったメモの類は、その記載事実が実際に起った時期と、それらが記載された時期とが一致、もしくは比較的近接しているだろうという事がいえる。そこで、上巻全体を統一して流れている私家集の意識と共通な意識がメモの上からもみられるのは、前述の通り安和二年秋頃までであるから、従って、上巻本文の執筆は安和二年秋頃までに行われた、と考えてよいであろう。又、上巻本文の記載は、全体を通じて記述内容、形式共に顕著な変化を示す時点、或は変化が収束する時点は見当らない事から、逐次執筆ではなく、一括してある時点で執筆されたと考えるので、その執筆は、安和二年秋以前のある時期、というより、安和二年の秋頃、と一応その時日範囲を限ってよいと思われる。

上巻末年以後、中巻安和二年春から上巻執筆時期と想定した安和二年秋頃までの期間については、素材としては上巻と同じ贈答歌や手紙の類が想定されるにも拘らず、同年の記事が上巻に包括されず中巻に組み込まれた事に多少の疑問が残る。この事について川嶋明子氏は、

「恐らく作者は初め上巻を安和二年まででまとめるともりてそこまで書き進んだのであろう。しかし十五年で区切れがよいので、安和二年の記事は切り捨てたのではないだろうか。そしてその後二年程して中巻をまとめようとした時、先に切り捨てた安和二年の記事に書きついていったのであろう。安和二年の記事につづけて天禄元年以後の記事を読みすすんだ時に感ずる

異和感は、私には書かれた時の違いによるもののように思われなければならないのである。⁵¹⁹

と推論された。

しかし、「切り捨てた」記事が素材として残っていたと考え、することは不可能ではないとしても、先に述べた安和元年から二年にかけての、日次記載の量的質的な激変、或は記述量の急増などは、決して連続的執筆によるものとは考えられないから、天禄元年以後の文章が先に書かれてあった安和二年の記事に中巻執筆の時点で書き継がれたと考える氏の説には従えない。中巻安和二年の記事とそれ以後の記事の異和感は、素材の相違からくるものであるといえるからである。

上巻が安和二年秋の実際執筆の直前までを包括せず、前年の安和元年までで終っているのは、安和元年が結婚十五周年に当り、結婚生活を振り返った全体として一つの時期を画するのに都合がよかったこと、執筆年安和二年は完全に終結しておらず、まとまった一年として記載できなかったこと、そして恐らく最大の原因は、この年に起った多くの重大な事件が、上巻を統一している「ものほかなし」というトーンで脚色し組み込める程十分に作者の内面で消化できていなかった事、であろうと考える。

四

上巻から中巻にかけての表現に現れた変化を多少掘り下げて考察することによって、上巻が中巻と別個に成立した事を想定し、更に、上巻の執筆時期を一応安和二年の秋から冬にかけて

の時期とした。

では、この時期の執筆を作者の内的執筆動機のみから支持することができらるであらうか。

守屋氏は、「もし日記執筆の固定的動機を求めらるなら、理想に生きんと欲し、人間として、女としてまだ若かった作者にとつての町小路女の出現にこそ、その端緒を置くべき」で、上巻の記述のみでも十五年の長きに亘る「煩悶の連続こそが執筆の直接的契機」であるとされたが、品川和子氏が、「とり分け明るく見える部分をさらにチョークで補正しているのではないかと指摘されたような、上巻のものはない身の自叙伝としての全体的統一感[※]は、その日その日の心情を手控えに書き付ける作業などよりむしろ多くの創作意識が必要とされるように思う。手許にある贈答歌や手紙などの素材を一巻の作品としてまとめようと思ひ立つには、それ相当の作者の創作意識を刺激するような出来事、即ち内的執筆動機が想定されて然るべきだと思ふ。以下に私はこの方面からの考察を試みてみる。

作者道綱母と兼家との身分差について、阿部秋生博士は、作者が兼家との結婚によってそれを埋めることが出来ると誤算したところに彼女の不幸が生れ、更に彼女は自らの誤算を悟ることができず、一方的にそれを兼家に求めようとしたため「思ふやうにもあらぬ身の上」が構成されたと説かれた。〈自らの誤算を悟ることができなかった〉作者の内面で育まれた当面の願いは、兼家の妻としての半永久的な地位を確保することではなかったかと私は思う。勿論、道綱母が世間的な地位そのものを

望んでいたというのではなく、兼家の妻として重きをなすことによつて兼家を自分の許に引き寄せておく為の願ひであつたろう。例の町小路女の不幸に手を打って喜んだ作者であるが、自分が町小路女と同じような運命、つまり、兼家から顧みられなくなるという事態、に遭遇することはないと保証は全くない訳である。

かくて、人にくからぬさまにて、十といひて一三二つの年はあまりにけり。されど、あけれ、世中の人のやうならぬを歎きつゝ、つきせずすぐすなりけり。一中略一かかる所も、とりつくるひかゝはる人もなれば、いとあしくのみなりゆく。これをつれなく出て入りするは、ことに心細う思ふらんなどふかう思ひよらぬなめりなど、ちぐさに思ひみだる。(康保三年夏・六二)

という一文にも窺えるように、結婚してから十一、二年も経過しながら、世間の女の人のように妻としての正当な処遇をも受けず(この言葉には時姫に対する羨望が隠されていると思ふが)、辺鄙な場所にある荒放題の家に住んでいることに兼家が注意を払ってくれないことで、作者は、いつ見捨てられるかしない我が身の不安定な状況に目を向けているのである。そのような不安な状況にある作者であるからこそ、兼家との日常的些細な出来事に対し異常なまでに鋭敏に反応するのである。そこで、「戯れ言とこそわれは思ひしか。はかなき仲なれば、かくてやむやうもありなにかし。(康保三年八月・六三)」というような言辞が簡単に吐かれる訳である。ところが、上巻康保四年十一月の、

かゝる世に、中将にや三位にやなど、喜びをしきりたる人は、ところ

く、なる。「いとさわがしければあしきを、ちかうさりぬべき所いできたり」とて渡して、乗物なきほどにはひわたるほどなれば、人はおもふやうなりと思ふべかめり。(六八)

という記事から解るように、兼家は作者を自邸近くに住わせたのである。中将に昇進して以前に増して多忙な兼家を通じていくには、前の辺鄙な住いでは確かに不便であったに相違ない。しかしそれはむしろ表面的な理由であって、兼家の自邸近くに移り住むということは「思ふやうなり」と他人がみるように、兼家の妻としての実質的な昇格であったに相違ない。「世の中の人のやうならぬ」と不安定な身の上を嘆じた作者にとつて兼家のこの処遇は非常な喜びであったことは想像に難くない。その喜びが素直に表現されずに「人はおもふやうなりと思ふべかめり」と屈折して出て来たのは、兼家の自邸近くに住むことによつて起る作者と時姫との間の心理的摩擦、或は作者の心に覆い被さってくる時姫の圧迫感に対する憂慮があったからだと思はる。それはそれとして、長年の願望が達せられた事の喜びは、それに続く「十二月つごもりがた」の記事を始めとして、上巻末迄続く明るさに浸っている作者自身の描出によつて露わに見られるところである。

一方では兼家の妻としての昇格を喜びながらも、一方では時姫の存在からみると自分がいかに軽んじられているか、如何に不安定な存在であるか、を離れて住んでいた時分より一属痛切に思い知らされたのであろう。翌安和元年九月の初瀬詣は、既に言われているように時姫に対抗して兼家の妻としての地位を更に堅固にせんが為「あまたの子」を授かりたいという切実な

願いが原動力となつて決行されたもの詣での旅であつたと考えられる。その初瀬詣の記述中にみられる、

忍びやかにと思ひて、人あまたもなう出てたちたるも、わが心のおたりにあれど、我ならぬ人なりせば、いかにの、しりてとおぼゆ。

(七三)

という叙述にも時姫に対する羨望と嫉妬が現われている。

半永久的な兼家の妻としての地位を確保する事が出来るかも知れない、というような状態に作者が置かれたにも拘らず、太刀打できない時姫の実力を思い知らされ、「はかな心ちには、なほかくてぞあるべかりける。我錦をきてとこそいへ、ふるさとへも帰りなん」と思ふ。(安和二年正月二日・八二)と、結局は元の状態に舞い戻る事を余儀なくされた事件が、中巻初年安和二年早々に起つたのである。

このへ下衆の鬪乱といわれる事件によつて作者は、時姫に並ぶ半永久的な兼家の妻の地位を得る事が決定的に不可能になつたことを知り、我が身のはかなさを、永久に癒すことのできない嘆きとして実感するのである。いつ何時兼家から見捨てられるかも知れない不安な状態こそ、作者が「はかなし」と感ずる最大の原因なのである。

作者がこのように我が身のはかなさにのみ心を向けている時、恰もそれを象徴するような事件が世に起り、作者の内部にへものはかなし」という想いがいよいよ深く、確固たるものとして沈潜していったのである。即ち

廿五六日のほどに、西の宮の左大臣ながされ給ふ。——中略——。そのころほひ、たゞこの事にてすぎぬ。身の上をのみする日記には入るま

じき事なれども、かなしと思ひ入りしも誰ならねば、しるしおくなり。

(八三)

という、同年三月の記事で示される出来事である。この、源高明の失脚という社会的な事件が、道綱母の精神とどのように関わったのか。「身の上のみする日記には入るまじき事なれども」と断りながらも書き留めざるを得なかった作者の心の動きはどのように説明できるであろうか。私はこの疑問は、やはり作者の内部にわかまっていたへものはかなし」という想いが、深く揺すぶられた結果として、初めて説明できるのではないかと思う。この間の事情については、秋山虔先生によって夙に分析されているので詳細は省くことにするけれども、「この大きな社会的事件が示す人間の運命のあざやかな曲線は、それは正しく私の身の上のこと、わが運命のそこにおいておのづからに見えてくるかたちにはほかならない。」と述べられているように、道綱母にとつての高明配流事件は、彼女自身の運命をさながら目前に見る如く浮かび上らせたことは事実であろう。先に述べたような情況の下に自分の運命に異常に鋭い感受性で対決していた作者は、この事件をきっかけに、煩悶の連続であるが故にともすれば磨滅しそうになる我が身の不幸の实感を、はつきり認識し直したのである。更に、「あまたの御子ども、あやしき国々の空になりつゝ、ゆくへもしらざちり、わかれ給ふ」と、余りにも大きな不幸に見舞われたまいとけない子供たちへの同情は、我が子道綱への憂慮と重なり合う性質のものであつたらう。

「そのころほひ、たゞこの事にてすぎぬ」とあるように、こ

の社会的事件によつて惹き起された心理的な衝撃から十分に立ち直ることができないまま、作者は閏五月つごもりから、翌六月晦日頃までの約一ヶ月間という長期に亘つて病床に臥すことになるのである。私は、作者が一月月に亘つて臥つていたこの期間こそ、自分の過去の結婚生活十五年間を、作品の世界に構想した時期ではなかつたかと思う。

閏五月にもなりぬ。つごもりより、何心地にかあらん、そこはかたなくいと苦しけれど、さはれとのみ思ふ。いのちをしむと人にみえずもありにしかなののみ念ずれど、みきく人たゞならて、芥子焼きのやうなる業すれど、なほしるしなくてほどふるに、人はかくきよまはるほどて、れいのやうにも通はず。新しき所つくるとて通ふたよりにぞ、たちながらなどのして、「いかにぞ」などもある。心地よわくおぼゆるに、をしからでかなしくおぼゆる夕暮に、れいの所より帰るとて、蓮の実ひともとを、人していれたり。「暗くなりぬれば、参らぬなり。これ、かしのなり。み給へ」となんいふ。返りごとには、たゞ、「生きて生けらぬ」ときこえよ」といはせて思ひふしたれば、あはれ、げにいとをしかなる所を、命もしらず人の心もしらねば、「いつしか見せん」とありしも、さもあらばもやみなんかしと思ふもあはれなり。

花にさき実になりかはる世をすて、うきはの露と我ぞけぬべきなど思ふまで、日をへて同じやうなれば、心ぼそし。よからずは、このみ思ふみなれば、つゆばかり惜しとにはあらぬを、たゞ、この一人ある人、いかにせんとばかり思ひつゞくるにぞ、涙せきあへぬ。なほあやしく、例の心地にたがひておぼゆる気色もみゆべければ、やむごとなき僧などよびおこせなどしつゝ、心みるに、さらにいかにあらねば、「かうしつゝ、死にもこそすれ。にはかにては思しき事、いはれぬ物にこそあなれ。

かくては、なば、いとくちをし、かるべし。ある程にだにあらば、思ひあらむに、従ひても語らひつべきを」と思ひて、脇息におしかゝりて、書きけることは——中略——と書いて、かたはらなる唐櫃にゐざりよりていれつ。みる人あやしと思ふべけれど、久しくしならば、かくだにものせざらんことの、いと胸いたかるべければなむ。(八五—八八)

この作者の病臥時の記事は、たとえ、執筆時点における作者の誇張や虚構が多少はいつていても、異常なまでに自虐的であるといわねばならない。この間に流れている作者の心の動きを私は次のように理解できると思う。

「よからずはとのみ思ふ身なれば、つゆばかり惜しとはあらぬを云々」とあるように、ただただ自分の命は少しも惜しくない」と強調しているのを裏返せば、作者の本心は、自分の死が道綱にとつては大事であっても兼家にとつては大した打撃にはならぬであろうという満たされぬ気持、更に、造営中の新邸をいつか見せてやろうという兼家の慰めを聞いても、「命も知らず、人の心もしらねば」の一文で窺われる通り殊更に我が身を兼家から引離してしか見れぬ孤独感、或は兼家に対する不信の念、にあると見るべきであり、この事は最終的には、一ヶ月もの長い間他事に紛れる事なくじつと自分を見つめ考えるところでたどりついた過去十五年間の感情の整理という形で、兼家と作者の関係の「はかなさ」の認識として、作者の内部を抗し難い勢いで覆つていったであろうと思われる。それは、安和の変による鮮烈な「人生のはかなさ」の認識と相俟つて、より痛切なものとなつていったであろう事は想像に難くない。

病中の作者の死への接近の感覚は、今日の読者からみれば大

袈裟と思われる程であるけれど、病といえ加特祈祷にしか頼る術のなかつた当時のことであるから、病気が長引き日を経ても回復の徴がみえない床中での作者の想いが、死に拘束されるのも強ち誇張とばかりは言えないであろう。そして、作者の気持は、自分自身、及び身のまわりの整理へと動いて行き、「かうしつゝ、死にもこそすれ。にはかにては思しき事もいはれぬ物にこそあなれ。かくてはなば云々」と、自分の心の代弁者或は代行者を求める事になり、直接には、兼家宛に道綱の後見を托する遺言をしたためる行為を起すことになるのである。

この極く小さな、今までの詠歌より直接的な自己表出の企ては、兼家との結婚以来歩いてきた他人が測り知る事のない自分自身の精神の歴史を、誰かに理解してもらいたいという作者の自己表出欲をいやが上にも刺激したのであらう。実人生に於る世界との係り合いの中では決して表現することのできない、もしくは表現してはならない複雑な自己の内面の相を、強烈に意識し、しかもその内面的自己の方がむしろ真実の自己であると感ずる作者にとつて外見に現われる面だけを以て自己を判断されるのは耐えられないことであつたに相違ない。そのような、いわば他者との会話、がでる以前の屈折した心理的情况は、理解を要求できる対象がない以上、自分自身の心により重く沈澱することになつたであらう。鬱積したまま、理解される事なく抹殺されるであろう自己の内面を表出する事によつて、そこに理解され得る可能性をつなぎ、一方で、自己を表出し、客観化する事自体によつて、一種の安堵を得る、その事に作者が最後の希望をかかげ、情熱をかきたてていったであろう事は、作者

の人性、時間的空間的に作者を取り巻く環境、を考慮する時、容易に理解できる。このようにして大きく育っていった作者の自己表出欲は、末だ一方に残っていた、兼家から完全に見離された訳ではなく、ある種の紐帯が確保できているという感情、を強いて黙殺し、実際には「そうなるのではないか」という危惧の念という段階にあった、という方が正確であろうと思われ、るへものはかなし」という観照めいた想念を象徴として前面に強烈に押し出した、皮肉な見方をすれば、まだ一種の、他者に対する期待、或は甘え、を秘めた作品、——蜻蛉日記上巻、として結晶したものと見る事ができると思う。

注

(敬称略)

- 1 押見虎三二「蜻蛉日記の文体論的考察」新潟大学教育学部長岡分校研究紀要・第五集
- 2 池田亀鑑「日本文学大辞典」
- 3 岡一男「蜻蛉日記の成立年代とその芸術構成」文林堂双魚房「古典と作家」収録
- 4 藤本俊枝「『蜻蛉日記』の成立時期について」平安文学研究・第二十五輯
- 5 石川徹「物語作者としての源順の作家的成長と蜻蛉日記との関係」国語と国文学・昭和三十年十一月号、鈴木知太郎「大和物語の成立時期について」国学・第二輯、後藤利雄「古今和歌六帖の編者と成立年代に就いて」国語と国文学・昭和二十八年五月号、など。
- 6 柿本奨「蜻蛉日記」解釈と鑑賞・昭和三十六年二月号

- 7 藤岡作太郎「国文学全史 平安朝篇」第八章
 - 8 喜多義男「蜻蛉日記講義」東京武蔵野書院
 - 9 同 氏「全講蜻蛉日記」至文堂
 - 10 守屋省吾「蜻蛉日記上巻の成立について」立教大学・日本文学・十四号。氏の論文の引用は以下も全て本論文によるものである。
 - 11 本稿中の蜻蛉日記本文の引用文に付した数字は佐伯梅友・伊牟田経久編「かげろふ日記総索引」の本文篇の頁数である。
 - 12 ある種の底本では、この箇所「康保四年」の注記があるため、この一文を康保四年のことと解する説もあるが従わない。
 - 13 平安時代の日記には公の日記として数多くの日記が残されているが、それらは全て「日次の記」であり、日々の天候や時刻などまで細心に記されている。又それほど記録的性格が強くないいわゆる「歌合日記」と呼ばれるものについても、殆んどの場合劈頭に年月日「日記」と呼ばれるものについてみても、殆んどの場合劈頭に年月日「日記」と呼ばれるものについてみても、殆んどの場合劈頭に年月日「日記」と記されており、日次が明確に記されていないものについて「日記」と記した例は皆無である。「蜻蛉日記」以前の文学作品で今日残っている唯一の仮名日記である「土佐日記」においても例外でなく、詳細な日次記となっている事は周知の通りである。
- 玉井幸助博士は、「日を逐うてあるといふのは、毎日書き続けられた自然の結果であって、日記の本質は、さうした結果に於る形式にあるのではなく、一日々々に於ける其の日の事実が、有りのままに記録せられてある点にあるのである。故に長い記録の中から、或一日を取り出しても、それは当然日記である。」(「日記文学概説」)と述べておられる。確かに日記の「本質」は事実の記録にあるとしても、その記録には付随した日次の記載が必要条件であって、長い記録の中から或一日を取出しても、それが何日の記録だとわか

る限りに於いて「日記」なのであり、日次が全く不明であれば、「何々の記録」ではあっても「何々の日記」ではあり得ない。「日記」が「日次の記」であるという点でルーズになったのは蜻蛉日記以後のことであって、この点でむしろ本作品は結果的にみて独創的役割を果しているのである。

- 14 次田潤・大西善明「かげろふの日記新釈」明治書院
- 15 秋山虔「蜻蛉日記」アテネ文庫・弘文堂
- 16 木村正中「蜻蛉日記における私家集的性格について」明治大学文学部紀要・第八号
- 17 松田成穂「「かげろふの日記」上巻に関する試論」平安文学研究・第二十五輯
- 18 野村精一「かげろふの終焉」国語と国文学・昭和三十年六月号
- 19 川嶋明子「蜻蛉日記における不幸の変容」国語国文研究・三十三号
- 20 品川和子「蜻蛉日記の表現における波動性(3)」学苑・昭和三十七年十二月号
- 21 阿部秋生「源氏物語研究序説上」
- 22 この部分についての解釈については、様々な説があるが、秋山虔・上村悦子・木村正中「蜻蛉日記注解三十三」解釈と鑑賞・昭和四十年一月号、の説に準ずる。
- 23 秋山虔「道綱母の文学に関する覚え書」国語と国文学・昭和二十五年六月号
- 24 松田成穂「「かげろふの日記」中巻に関する序論的考察」日本文学・昭和三十四年四月号

〈付記〉

本稿は、昭和四十一年度東京大学文学部国語国文学専修課程卒業論文

の一部であり、去る四十二年五月二十一日の九州大学国語国文学会で発表した草稿に加筆したものである。

なお、本稿欄筆の後、伊藤博氏の「蜻蛉日記の執筆時点について」(「言語と文芸」昭和四十二年十一月号)という論文が発表された。本稿二・三章中に、氏の論文の「月日の記述方法」、三「贈答歌と独詠とできごと」中の指摘と重なる点があったが、推論の仕方、結論共に異なるので、敢えてそのままにして公にすることにした。

▼受贈雑誌

昭和42年8月～12月(その二)

女子大国文(京都女子大学)46、立命館文学288～285、語文(大阪大学)27、人文論究(関西学院大学人文学会)17巻3・4、18巻1、甲南大学文学会論集34、試論(甲南文学会)13、愛媛大学紀要12、愛媛大学地域社会総合研究所研究報告9、中世文芸(広島大学中世文芸研究会)38、近世文芸稿(広島近世文芸研究会)12、九州大学文学部紀要(心理学)10、山口大学文学会志18巻1、別府大学国語国文学8、香椎潟(福岡女子大学)13、文献ジャーナル7～12月、東洋学術研究6巻4～8、書陵部紀要18、能楽思潮40・41、古典と近代文学1、日本学術会議月報8巻3、朝鮮学術通報4巻3、肇国8～12月、日米フォーラム7～10月、田唄研究10、白路7～10月、八雲10月、城35、Moulin 21。

▼受贈抜刷

書記の曆について(京都府立大学学術報告18) 園 正造
翻刻・俳書「安楽音」(有明工業高等学校校紀要2) 田中道雄